国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

6. 4. 13
購求

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

十六

山姥

野守

安達原

紅葉狩

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

山姥

裝束之覺

シテ　面近江女　髪　同帯　着附腰巻目　小コフシ厚板

後シテ　面山姥　髪白交　同帯ハ子元結　着附白ノ上ニ厚板

半切　腹帯　壺折烏帽子　シテ杖　木葉ノ上ニ

連　連面　髪同帯　着附箔　唐織

シテヅレ

●ワキノ先ヘ立次第ニテ出正先ニテワキト向合次第不識地次第ニ正●来ハ何くも乃ワキヘ向合●此あたり小正●先こゝろも里ゆへニテワキ坐ヘ行下ニ居ワキ来テいかゞトハト云ワキヘ向奥物も叶と双ひトハト云其時寅やト詞●とても正●道もあへてワキヘたびゝへト云テ正●ワキハ立ゐてくらそれ其時立居ル●ありよりシテへ向●こゝひシテト一取ニ下ニ居●シテ中入ニ入ルヲ見テ正ヘ直●後シテ屈化うんの気を此辺ニテシテ舞臺へ入ルヲ見テシテへ向●鬼一口の正●浮世離をシテへ●すゝ忍川の正●急おとろくシテへ●急の正●山巡りをそろそシテへ●急の正●雪ハ猶小正●残りシテノアトへワキ入ル

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

カケリ ○拍子 ●扶

○┃○ 山廻り（クワウロギ 大コキ右廻込）○ 天天 ○ ハア イヤツア ● ○┃○ ○ 天 天 ○ ハア イヤツア ● ○┃○ ○

○┃○ ○ 天天 ○ ハア イヤツア ● ○┃○ ○ 天 天 ○ ハア（左ニ一足フミ出シ） イヤツア ●（扶ト一所ニ正ヘノリ込）○┃○ ○

天 天 ○ ヒラキ 扶ツキナガラ角へ行 角トリワキ坐へ
行夫ヨリカトヲトツテ大小ノ前ヘ向ニ行ナカラ扶ヲ
コニノ両手ニ持大小ノ前ニテ小廻シテ扶両手ニ持ナ
カラ右ヲ正ヘ（此処段ノリ込）○-○ ヒラキサヽニ扶カタケ折敷
右ヲ正ヘ一ツ合シ又大小ノ前ヘ向ナカラ合シ右ヲ引
テ立時扶ヨコニノ両手ニ持大コ坐ニテ小廻シテ正ヘ
ヒラキ 扶ツキ 一樹の陰ト謡

舞附

（ワキ詞）荒ふしきや暮るましき日にて候ふか俄に暗く
なりて候よ（幕切ル）如何と仕候へき（シテセル（幕ノ内ニテツレヘ向）謡フ）なう
旅人御宿参らせうなう（詞 直ニ出ル）これハあけ
路の山とて人里遠き所なり日の暮
て候へハ（足ヨメツレ）庵にて一夜を明させ給ひ

く（ワキ 直ニ出舞台へ入リ中ヘ出下ニ居）荒嬉しや頓て日乃暮前後
を忘して候頓て参らうするにて候 今（シテワキ 謡スミ）
（テモカヘハズトクトト下ニ居ツレヘ向謡ヒ出ス）宵のお宿参らする事とりわき思ふ子細有
（詞）山姥の哥の一節うたひて聞かせ給へ年
月の望なりひなの思ひ出と思ふへし
（下）其為に日をくらし御宿をも参らせ
て候へいかにさやうにわせまいらせ候へ（ワキ詞 正）是
ハ思ひもよらぬ事を承候物かなさて
何とて山姥乃哥乃一節とハ御所望
候そ（シテ詞 ワキへ）いや何をかつゝみ給ふらんあれ
に坐しまするハ百ま山姥とて隠れ
なき遊女にてハ坐しまさんや（正）此哥
の次第とやらんにも（下）よし足曳の山姥の山

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

西下た心持
ア[illegible]ととと思ふれうり荒面なやへ引面直シ
曲薬ふりてれ美名さて(ワキへ)浦乃山花をハ
いう成るのとう云ふ(ワキ正山)
咲とハ山ふもを冠女とても曲毎ふをろく
てうく(シテワキへ)冠女とハ女の冠とやうに冠成古
人成とも山ふもを女好(正)ハ童うれう
もてハさ(ナル)ともや(ナル)事次第ふくさせ
今よとのとをめ(ツレへ)ふ給ふそれ(ツレへ)ふもを無乃ハ
奴恨(引サシ)ひ居立心持
(トカル正へ直シ)道を経名ふをきて
世情等浦の物花を用くるさ一曲の妓
あ[illegible]ふや御ハ童うれをを弟ひ薄ふ
音楽の物者の等仏ふをふ[illegible]
ふとう童も物也をろれ帰性の若ふ

よ[illegible]さんと恨をふ山乃ふ歌を
(ツレへ)ふもくくふ心を物ふ物の山花う(サシ居立)ふ冠
ふさて来くう(ツレ上正)やれ[illegible]の事をさ物
小趣ふ降の山花乃先立ふりふくう
(シテ引ツレへ)我もこれ山ふ[illegible]
我名の法を学んとあり添いふくふ云
とて八我ふ執をくふくふ(シテカル正)氏上ハこう
く辞ふふいおふやふ[illegible]
うり好んとくくうふよう時の風よをと
うや物よをもふもれハ(シテ引ツレへ)あはさるふ連
さふ仕ふくと治て月乃数ふ小風ひみ
(ワキ西へ向ジテ引)ふ[illegible]ふ[illegible]
(ワキ正)たふ上正ふ見ナガラ(正へ直シ)
直ケうふ[illegible]乃月(上ふ)さ紅さふ小ふくと云く

角の西ノ方へ向ヲテヨコヒアルバさなきたふ上正ふ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

深山邊乃(日返三ツ立)(右ウケ)雲に心をかけ添て(ツレ向)此山姥
が一ふしをうたひ給ひし(右ヘ向ヤ出)時我姿
をもあらはし衣の袖つきて(左ノ袖ニテツレヘサシ出セヒラキ)移り舞をま
うへしといふかとみれは(右ヘ廻リ)たちまちに(シテ柱ノキハニテ)かきけそ
(小ニマワリノヒラキ)れに失にけり(入)(ツレ上)餘りの事のふしき
さに実にとおもひ候へ鬼女の詞をたかへ
しと(上ゲ)松風ともに吹笛の声すみわたる
る谷川に手まつさへきる曲水の月に声
(▲シモク杖持扇サシニセイニテ出テ松ニテ足トメ正)すむ深山かな(▲後シテ下)あら物すこの深
谷やな物すこの深谷やな寒林に
骨をうつ霊鬼なくなく前生の業をう
らむ深野に花を供する天人返す返すも
幾生の善をよろこふ(シテ右ヲ見)いや善悪不二何
をか恨み何をか(正ヘ直)喜はんや(ヲ)萬箇目前の境
界懸河渺々として(上)(杖前ヘツキ両手ヘム子ヘアテ)いはほ峨々たり
り(上ヲ見)山又山いつれの(右ノ方ヘ見廻シ)工か青巌の形を
削りなせる(正)(杖ツキ舞臺ヘ入リシテ柱ノ手ワニテノ正)水又水誰か家にか碧潭
の色を染出せる(ツレカル)おそろしや月もこよひ
此山陰よりさし出しか月かけをも八
を山姥にてましますか(シテ向ツレヘ)連をや月におも
それしとの叢氣色までもおもひしらるへ
し我にな恐給ひそとよ(ツレ正)此上はおそろ
しかゝら八玉の月の隠れより隠れ出
る姿を見し人なれとも(シテ付)髪にはおどろ
の雪をいたゝきまなこの(ツレ上)光り八星のことを
し(シテ下ツレヘ)扨面乃色八(ツレ正)さ丹ぬりの(シテツレヘ)軒乃

瓦礫の名ぢを（ツレ）こゝもしら雪て（二足ツレツヽメル）
うゝまを（シテ）河かたろう（ツレ）いまゝ（地謡正）乃（地謡正）冠
一にの雨礫夜（ヒラキ）（出カケ）かみ狩り（ヒラキ）さ沢おそ
流し（ヒラキ）沢をよ（ヒラキ）。（正ノリ込）思ひ（ヒラキ）まう河そこと（ヒラキ）ひ
しく人まても（切を廻り）（シテ柱ノ）流ら（シテ行）面道
（キハシテワヒ両面下ケ正）降りもう（地謡正）（シテ行）面下ケ正）
一時をよ重に（ツレ）ゝと（地謡正）花か清香厚か
散をハ於乃し海ちうよ好き人の一曲の
手拍をかけて（ツレ）返よ（ツレ）ゝ（地謡正）思ひ語ふ（ツレ）
（ツレ）きよ氏ふ（地謡正）ゝをこそかくそ（ツレ）ゝよ
及ゝ無山中か（シテ）一色乃山雪羽をたゝく（秋持ナカラ両手ニテニノ手合）
数ハ酔泥（ツレ）独ハたゝ（シテ）袖見（ツレ）ゝをゝゝ（ツレ）
この花乃（シテ）ツレニ足ツメ）舷波のとう（ツレ）のりあゝ思

上ノ句正
（特ニ沈ミ込ム）（シテ）一ゝ（ツレ）ゝ（地謡正）ゝ山ゝ（返シニ出ヒラキ）思りをそ
ゝゝ（ツレ）ゝ（シテ）吏山とゝりもちりひちよ
りおこつゝ（地謡正）天雲かゝ風をんてゝ凡雪
（地謡正）海ハ苔乃（地謡正）病ゝ（地謡正）ゝてゝ波満をたゝ
おゝん（地謡正）ゝ（サレ）一河宇ゝ（地謡正）谷ゝ色指か
ひゝく山ひこの（ロ）雲雪をさゝ（地謡正）ゝ（地謡正）ゝ
色ゝひゝ思ゝをりねこゝ（地謡正）ゝを宝ゝう
くゝゝん（シテ上）とゝ秋ゝ狂山泉の乱久山た
ゝゝて海をゝ（地謡正）音ゝゝ（地謡正）ゝゝ
（下ノ句）花ハ海ゝ（地謡正）ゝゝとして日ゝ（地謡正）乃
光ゝをかけ波かハ顔松きとして風
雪ゝの愛をや吸ゝ（シテ下）けんゝんゝ（地謡正）ゝ
雲おゝゝくゝゝ（ロ）んこ（地謡正）谷ゝ（地謡正）ゝて（ツレ）ゝ

谿くも声なかりし [クセ正] をちこち乃たつき
も知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥
の声すごき折〻に伐木丁〻として山 [右ノ方]
[ヲ見] さらに幽なり。法性峯[正ヘ直]そびえては上求菩
提を表し無明谷深きよそほひハ下化衆
[弁切ニ 正ヘ直] 生を表して [右ヲ引 下ヲ見 下ヲミカ] 金輪際に及べり [立] 抑山姥ハ
[此末半 囃子ノ 通違ヒ 目計誤ス] 生所も知らず宿もなし。唯雲水を便り
にて至らぬ山のおくもなし [上シテ] 然れハ
人間にあらずとて隔つる雲乃身をかへ
かりに自性を変化して一念化生の鬼
女となつて目前に来れども邪正一如と見る
時ハ色即是空そのまゝに仏法あれバ世法
あり煩悩あれハ菩提あり仏あれハ衆生
あり衆生あれハ山姥もあり柳ハ緑花ハ紅
の色〻。さて人間にあそぶ事ある時ハ
山賎乃樵路にかよふ花の蔭やすむ重荷に
肩をかし月もろともに山を出て里までおくる
折もあり又ある時ハ織姫の五百機立つる
窓に入て枝の鶯糸くり紡績の宿
に身を置き人をたすくるわざをのみ賎の目
に見えぬ鬼とや人のいふらん [上シテ] 世を空
蝉の唐衣はらハぬ袖におく霜ハ夜寒の
月にうつもれうちすさむ人乃たえまにも
千声万声の砧に声のしで打つハ唯山姥
がわざなれや都に帰りて世語りにさせ
給へと思ふハ猶も妄執か たゞうち捨よ

何ものぞ〳〵是我の山ぬし（ツレへ）
若し〳〵（シテ正）あの川の（地ハヤシ前サン枝持トシテ正）山ぬし（カケリ）一樹の
陰一河の流れ皆是仏生の縁そうし給ふ
てや我名を名月の清きを名とう一節を
犯す疑ひのなきにあらず（中ノ出カケ）懺仏祭の因そう〳〵
（足ノ）流れ多き（秋二両手ノカタヘ指立（面下ゲ）立枝ツキノ口キ枝ステ）
（前ニロゲ上地）春ハ猶よさうに浪〳〵（シテ）花を尋ぐ山ぬし
（地）秋はさやけき影を尋ぐ（シテ）月見ぐ方ふこ
山ぬし（地）冬は更け行く夜半の雪（シテ）雲
をさそういく山ぬし（ロ）めぐり〳〵て猶も
をさまれる世の亀の雲ぐ鹿棲つて山姥
こゝろしる君なりやと〳〵と誓ひ
かけり給ひさらば今迄変りあらよ

とゞへ〳〵う山又やあらふ（ワキ笠ヨリサンテシテ柱ノキワヘ
行ク廻リノトキ右ウケトメ）
やはか山姥ぐうと〳〵て行方をも
成かくり
又
（前ヘツヒサシ廻スヤウニメカシ上ヲ見）
雲とさそひて山ぬし

●仕舞ニテ山めぐりをするとも此跡メキ直ニいそ
まずして唯山ト謂フ

助太刀中上霊の形

（イノ字ニシカク）
●いで〳〵若者（大キク元リトウタウ）
●〳〵（立処歩シワケル心ニテカタウタウ）是成れ
（ウカヤウニメヲテウタウ）
●かんこ若衆にて

●扨も事のしてに打ハ有一ツ打合スヘキリ二ツモ三ツモ
打ヲアレ共是ハ習ヒリ
●ヤセ枝長サ立テ乳通リ上ヲヘクニ赤キ切ハ用イズ廻ス手目ノ切ナトニテ
ヘク

山姥

装束之覚

シテ面痩女　襟浅黄　着付箔　無色唐織　髪長
髪帯無色

後面山姥　襟花色　着付箔縫入　半切　腰帯
坪折拿枝唐織　山姥髪長　髪帯　扇子

連面是面　髪長　髪帯　着付箔　唐織　扇子

舞附

●シテ来　●シテツレ紫
●狂言詞無之

ワキ〻先ニ立次ニシテ出正先
シテワキト向合次ニカタヲヅ
よき光ありとてとくけたのむ〳〵仏の声

地次ニ正
寺男称ん　共に都もとふ住吉の

みてい又共ふ海もの事を物やくま山

焼そてかれるを延女ぶてやあ

うふの宮を戸隠の山祇の山めぐりとて
ここの事と曲舞ふ能てのうしろびかる
ふうり京の宮郎の下ゐいして又此
次を音光寺へ四季うまこと此中郎の祖
某の能中堂の伝説の宝音光寺へと
急い郎と出くまこと張やもの宮の御船
こうれもく事をかくちの山織て神く
寝ちる玉江の鶴うまて来る鶴次
雲隠ぬひやる私をうるも 梢波を
つ遠ちの〳〵かくちの私の夕煙
まの浮身の罪をさくる法花のは
るさのうこと中間雲波うかひと鶴
波の国の来る里よこそいと〳〵郎ハ

遠さうるさうひ川まも芦ふうるく
正 此の祖小芦いまも鶴後鶴中の境
川ふ此ぬまて小芦よう音光寺一の乃
二ひる中ゐし祖小所の芦ふ芦やまふを
るまていまつふ此ぬ（ふキイテロ半型（行下二居
いへ 狂言 堤川立宗のあをの芦ハいうやう米
此用ふていて 芦も郎方の声ふくの芦
ふ音光寺へのひおくて作りうへ
狂言 七事ふて小芦うを音光寺へのひあ
まふ此ぬの中ふも上ひうひのけう鶴
とうての雲氏のまう鶴ふ如来の如を
ふ如ひた鶴ひまてふもんのみてこもい
ふんの津ふたふられたる乃ふまを

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1
ガラス使用

銀のうを被き御手のようも出ければ
跡を一度の手うへいかゝ事のおのいまう
おの仲ひきうおてはれ出けんなんさ
らへ記うおての百番ゐなといかひふ
ひかまつてまのおうへ（ワキ）称しおう
おの数のおり数うり女性上帝国乃よて
の百千中ひへ〳〵（狂言）暫まおの待つく
ほうへ（狂言）ゐほひ（ワキ）若者るへの路次
の景体ひてへ〳〵てこつのまひ中
おもおけう歌とひてこまんの浦波収
公の浄きふたくられたるうおてゐう
他の番物いかゐ中ひ（シテツレ）事ゐ事ふ
通る西方の浄土いかゝ著信とひ若い

又法花未定の垂迹おきいかゐ海の山と
やらんおりうへしてもひ（正）約の旅なんて
事おをい先おうおおきかうをしおて
ありうへしひ（ワキ）ありへてきひうへ（ワキ）さおら（正）
いこまひ中ひへしきんせんの人の浦うしゅの
（狂言）先おい（ワキ）さおせんの由ひてうへいこまかけ
ろ越とやらんをうちまとしおて内祭り
なるへきとの立旅ゆくう百業内者いつて
ありうへ（狂言）こま事おていやまれのいこの事
おて有も叶いぬ用の事ひ百おまうへく
い（ワキ）作る古事おて持ふ私業内の事
おくう百まおれ十い（狂言）重て取り百い
ありへひてきふなて当先立立うへ（ワキ）まき祝

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

着中てはさはらいやうてゐる
ふとるゐて(ハトキイテ正向ヨリニ立ヲル)
ゐては狂言何とゐ流ゐへ先ゐやくけんぶん
放山伸経ゐてハハワキ謡ゐ夢及ゐ
ゐりハけんぶんなるゐ放ふくはやきる通
中ニ高物なるの叶ふへきを放ふくいなく
ハハ狂言いやゐのとやらん日のくるゐ拝かいなく
ゐるのワキ未日ゐるくゐ係ゐ着てゐ相
成ゐのうゐ泊りゐなくハハ狂言いや泊りハ
ゐるくハ

(イタエケワキヘ向ヨビカケル)
ニテ)ゐふくきゐ人お宿ゐりませうゐふ
狂言(地謡ゐりませうゐふトキイテニテノ謡ノ中ニ不構ト云ワキ仰ヲ受ケテゐふト云ヲ聞ヲ目断)
ゐ宿かりふとも(ワキ)かもら迷い(ワキ)心得てゐる
(直シ出)是ハゐけつの山にて人里遠き所ゐり日の

(ニテ向)
着てくへいるゐらハいゐ落ゐて一巻を唄ゐ
(足ヲトメ)ゐりくへ(ワキ)ゐらう是ゐ(直シ出ル橋ガカリ長ケレバ是ヨリ直シ出ル亜ニブタイヘ入ル)ゐ
(ニテブタイヘ入下ニ居トキ(ニテ三下ニ居)
橋掛リニ元カケレバワキヘ向ヨリニ足トメヲ是ヨリブタイヘ真中ニ下ニ居ルヘ向ヘワキ脇ヨリ前ナニモふとらるゐくハ中ヘ行下ニ居ル)
四宿ゐりゐ夫ゐりふゐ(下ニトクト居テ今ノ月ノト視ルス)今ノ月の
四宿ゐりゐ夫ゐりふゐ
山地の守ハ一節うるはく笑き世流ハ羊
月の光ゐり鄙のれんし出と思ゐし
(正向キテモ直ニ向合テモ)
との場ゐて
(との為ニテ正向ケハコニテツレヘ向)
なてくへいる程ゐもこと是ゐりくへ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

ワキ 先ハ思ひもよらぬ事を承り候て
候とてそれより山姥のかゝり一ノ
ものをとて ニテ いやワキへ 何をつゝこのあらん
物思ひの慰にも候へかし山姥
とてかくもんるもしばしもまたれ候
や 正面向ノ 先此方の望とやらんおもしろ
門の山姥の山巡りをもとゝ存候
面下ケ 荒面白や 面直シ 先ハ曲舞かゝりての実
ワキへ 名相澤の山うばをもいふ成ものこの

あらし吹ても ワキ 正 山姥こゝハ山かつ
風吹とても 曲舞かゝりても見ばやと 面下ケ ニテ 思
女とる女の思ひ 面直シ なき成た人の
思ひも山かつ賤の 賤ノ ワキへ 女のよりそひ
そのらんとや 正 笑ひまよひいさゝせ給ふ
その業の業程も中心ふる舞袖
いぬ根ヲかきりたる 正 ツレへ 色を極めき
をさて世情美徳の妙花ふたゝび返世
一曲乃ばるゝ 名 あらハづかしの 名

も弟子森観音ホの妙音の声佛
事をもなしおはつてとうとらいも物思
の通情性の若雪よるさ声と招
をいの山の多獣も留をつく声をいの者
その山姥ヶ雪老(ツレへ)(正)ふ思儀の事を学ぶれ相る誠の
山姥の老まて参り給へふの手我出て
の山廻りまのしもあに事る事(ツレへ)
の体を学ん為ぬり遠ひまひて去

とてハ教ゑ教をとらしまへ(ニヲシ)(正)此上ハ
こゝく辞しなハおそらしや若者の為
やゆうるんとうからはの
てうしをまやや物ゑ教を学ぶ迄も
(ツレへ)おとさをゆく連さらハ着るをまちて
月の表ゑ小嶋ん活ゑく我も又
(内へトリ面下ケ)(正ノ直ニ気ヲコメ)
ホの姿と影ゑしをいやうの祈ゑ
西方ヲ見西方目付柱又ハ橋掛ノ方ヲ六先ノ
脇へリ付ケ見北笛座ノ方ヲ左ノ脇ノ付
ケテ西方ヲ見西ヲ半坐ヲ六西方見ル直ニ
面ヲ正
(正ノ直シ)
矢月ゆ
上ヲ内ゑきまん着をを
(立)
ゑく海山へのく雲の心をを

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

添て此山うもり一うかすとらうさ
（ツレへ）
ひるハいまの我家おもひいでゝ衣の
（目付柱ノ方ヲウケ目付柱ノ方ハ二足ニ二足出ル）
たゝ袖にてツレ（右サシテツカ〳〵ト出ツレヲ見ル）
油つきて移り筆とまよへしこいかさま
（右ハ引シテ柱ノ方へ行足トメヒラキ）
これいそのまゝかきくらかうせの香り
（小ヒラキ正ヘヒラキ）
（シテ中入ニ入ヲ見テ正ヘ直シ居ル）
中入
（正向キナリニウタフ）
（シテ）
栗りの事のうもきえし更ぬ降こゝも
もはへぬ鬼女の泪をたゝへしと孝程
たよ吹笛の〳〵壱泥さる谷川
かまつさへるあの月かな

ともむ涼ふかく〳〵
（以越一番ニテベク上ケ出ル右ウケ一ノ松ニテ正向足トメ後ニテ）
橋掛ノ柴物スゴクカルノテラヌヤニ秋ヲツク処ニ大キク上ケハビロクフク
なやかなりおもとこの涼なやか叢林
（右ヘ引向ヲヨク見）
小雪をうつる君見るく〳〵岑生の
業を招む涼師よ花を供ふる天人
（ノビテ正ヘ足ツメル）
西へ〳〵も教生の苦をうつもあ
（右ウケ秋ヲ右ノケックムケル心持面下ヲウツムタメ）
いや当夏日ニ物をの招ニ物をの悦い
（正ヘ直シ）
んや当国目前の境界きんの色りく
（秋前ニツツキカラ大ノラニ左ノ手モカケ左ヨリ二足ヤガリツヨラムキニアテ）
（ハラヲノバシ向ツ高ク見）
こしてハ涼こうり山又や面いつき
のたくこう雪叢の形を判ヲあを
（左ノコシヲトシ右ヨシサシ引正ヘ見返シ向ヲ見）
（左ノコシヲ引キ右ヘ見ル）

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

左ヲサシ一形並ヒ内へ トリブタイ一ヘ入

水みつ川浪の家まの碧潭の色を深

シテ柱ノ先ニテトメ先ヲフミ出シ右ヲノコシテ いさせ給トツル

いさせ給 シテツレ おそろしや月もふ シテへ向

ふき山路よりそのさ庭をしたふり深

こゝは長生殿まくま庭にゆ シテ 述を

やかて出ぬし云の気色ありも志 ツレへ

あらしめさる雑へし我らか思ひ出をを

こよ シテツレ 正 地上にあらしあらうを出

のんき庭きみよすき影出るに波をとも

八人寿九 シテ 髪かハおなしの雪

栽き シテツレ まかこの光りハ星のことし

シテ ツレへ 御面の色まで シテツレ 正 さよめりの シテ 軒の 右ヲウケ上ヲ見

尾の鬼のくちを シテツレ 正 こよひ始て

みる事を シテ ツレへ 何かたとへんいすくへの 左ヲツメヘ右ノ足ツメル

上ゲ 正 正ヘヒラキ 君一人の為の あるし かこ スヘ拍子二ツ 身ヲ直シ正ヘ出

すりさいなきおる御しさ其ののよ 足トメ 六ツ拍子 ツヱ 左ヘ入リ込ノ込 トキツエノシリ上ゲル

地 あらゆる何をとなひしんよも我ろの 三足ヒラキ 右切ヨリ左ヘ廻リ右 右切ノ中ヘカケテ足トメル

正ヘ直シ正面ヲ見テモつくしやト面ヲセル此面ヲセルトキツムリ少シカタムケル心ヲ右ノカタヘカタムケル

うへか残ぬへき浮世経りもえやし シテ柱ノキハニテツレヘ向

シテ 面直シ 春の東のつなを千歳まもるしとハ申

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

小清香月かゝれる袖さゝのに

ツレへ 幻色人の一曲のその袂もなつかしあよ

二足ツメル 二足ツメル ヒテ向 正 ゝゝ唄ひ舞ひ給へし ヒテ 事よ式よ

ハこもうくもいふよ及ともなき岸に ヒテ 一

手ヲ上ル杖持ナガラ両手ニツ共合ス右杖ノサキヲ左ノ並ヘカリ共合ス又杖ヲ右ヘケテヲヨリニツソキテモヨシ

声の山多羽 右杖ヲ合セテモツテモテヨリ此手同様 ヒテ 袖を白妙 ヒテ 雪とうくらたゝの

左ノ袖前ヘ出シ見

ツレ向 ヒテ 袋波のとう ヒテ 二足ツメル のりなぬ

正 事よ 正 ゝゝ足曳の山ゝもゝ 正ノ出 ゝゝ山めぐり

右足ヲヒキヨセルしき ト杖ニツヲテ右ノ足ツメル

△地次ヲヒキテ拵ヘクツロキ杖後見ニウタヒ掛ヌキ真中ヘ行コカケ正 ヒテ その山ざいつ

ともりおちりおこつてゆま雪こうゑ

きんてうの岸洞い苔の森ちおく

りて投浪をたゝむそんぶたり ヒテ 一泪

地ヒテロシテ舞ヒテンニ泪アセルヲモアリ先ヲ不変ヲ主キーアリ

雲き谷の竜胆よひく山ひおの笹

声をはたゝとう竜ふ雪ぬ

ゆもゝんと竜しも市にくやらん

ヒテ とに我をも山ふの峯を心たゝし

てうこ色く谷ふやしてゑをし

日 前ふ洞ゑ雪やうゝくして 月ぬ

の光をかゝやかして
風雲のごとを破ふて来る面ゝも
打て帰ふ〳〵くるかんの苔塔の
して多聞もえつゝし（シテヘツレヘ）（正）
をつきもくぬ山ゆるおつゝなくも
呼ふるゝ声をこゝに打ふ成ま丁ゝ
（正ノ遠ノ高ノ見テ右ノ方見ヒ左ノ見ル処ヨリ目計テ右ノ方見ヌヨリ少シ前ノ右ノ方ノ前ケル）
して山さの（向ノ遠ノ高ノ見）
（正ニ直シ）
えてい上求菩提をひらかし無明谷
深きをおひい下化衆生を
（拍子二ツ）

引立左ノ川右ノ腰ヘ川付ケ向ヲ見テ扇ヲ上方ヨリ大キク前ヘ出シソノ扇ノ景ニメヲイテセホヲヨリ川立扇ノ先ヘ目ヲツケ下ヲ見ル又川立右ヲ引右ノ膝ヘ川付ケテ座礼ヒシ居立前ヘサシヤリセホヲヨリ引立下ヲ見ル
（打切ニ正ヘ直シ）
て金剛さいそ〳〵おう金
柳山姥を生ぬもゝ〳〵岩ゝ
（立）
峰雲のをたゝなをくいてぬ山の奥
（歩辺）
九ゝ〳〵無思ひ人留ぬ（ひ）ひて
（窮ヒラキ上テ）（大左）
つる雲の衣をゝへ（ゝ）ゝ
右
して一念化生ノ鬼女ゝて目前ぬ
（正ヘ歩辺ヒラキ）
事のをも邪正一如をそなはい色即是
（身ヲ右ヘ出シ直ニ前ヘ行）
空真ゝに（角トリ）（左ヘ廻リ）仏法ぬ思ひ世法ぬ煩悩ぬ
（大小ノ前ニテ正ヘヒラキ）
思ひ善根ぬ〳〵おゝ無思ひ菩提ぬ

ハア イヤツア　杖ツク　右拍子　天　天　左拍子

ハア イヤツア　杖ツク　拍子右ニ右ヘツヌケ左カヘテミ出シ　杖ヲ前ヘツキ右ヘリ込　拍子ニテフミヒラキ杖ヲツキ　右拍子　天　天　左拍子

ハア イヤツア　天　天　杖ツキナカラ角ヘ行左

此角ヘ行処正ノ二三足出角ヲ見テヲイテ角ヘ行

角トリワキ坐ヘ行ワキ坐ノ前ニテカドヲトツテ

大小ノ前ヘ行ナカラ杖ヨコニノ両手ニ持大小ノ

前ニテ小廻リシテ杖両手ニ持ナカラ右ヲ正ヘソリ

此正ヘソリ込トキ杖ヨコニノ右ノ手先ニナリ左ノ手

アトニナル　拍子フミヒラキサシ杖右ニカタケ

下ニ居立左ノヒサタテ右ノヒサツキ右ヲ正ヘツガウ

シテ又左ノ廻リナカラ合シテ笛座ノ方ヘ向杖カタ

ヨリヲロシ立太ヲ坐ヘ向杖ツキナカラ直ニ太

ヲ坐ヘ行杖ヨコニメ両手ニ持小廻リシテ正ヘ

ヒラキ杖ツキ諷ヒ出ス　正一樹の陰一河の

流ニ凡生仏生の縁そのうへまでや

多劫を夕月の浮世と見くるひと

うへも扣ふ浄陀の道まで　シテヘ　ツレノ方ヘ出

中ニテ足トメ右ノ足ヲ引ナカラ左ノ手向ノ方ヘ太ヲ杖ヘカケテニ居立ナカラ右ヲモジヲイテ下サゲ杖右ノカタヲテ前ヘツ

ヲ居立ツレヲミカヲ見

衆の国をもし若ゆめおろや

面下ケ　立杖ツキナカラシテ柱ヘツロキ杖ステ角ヌキヒラキ持

明ケて帰るや河の　地　正（直ニ）春の柳も

角ヘ行　角トリ

さくらのとまちし　シテ花を折て　左廻リ　地

大小ノ前ニテ正ヘヒラキ　ヒラキサシ面下ヘトリ　正ノ上ヲ見

秋もさやけき　地　月を折て自ら

サシ廻シ角ヘ行　右（ホ）廻リテ角トリ　角カサシ

るかと思めくり　あるさつめくみる

の雲の　雪をさそひて山ざくら　角ヘ行　左ヘ廻リ
大小ノ前ニテ小廻リノ足ヘヒラキ　ヨコサシノ正ヘサシ
めぐりてまよふ名をとゞめるも有ぬべし
ツメヒラキ　正ヘシカト見　左右ノ
こゝのちりはものて山姥となまよふ鬼
直ニ正ヘ右ワノリノ足
女の曲見るやこゝろやと　拍子フミ右ヘトカヘシ下ニ居立　ナカラ雲ノ扇ノ正ノ上ヲ見
後ヨリ引立テ　下ヲ見　手サケ立角ヘ行
名のみこそきけそのまゝ有よとも
ワキ座ヨリサシテシテ柱ノ方行
みへしは山又山の山ざくらかな
シテ柱ノキハニテ小廻リノ正ヘヒラキ
四ツ山ずゝや四ざくらして行もも
右ヘケトメ拍子フミ　扇タヽミ入　立ヒテノ下ヲ
ちるいおかり　ミツキ入

督業

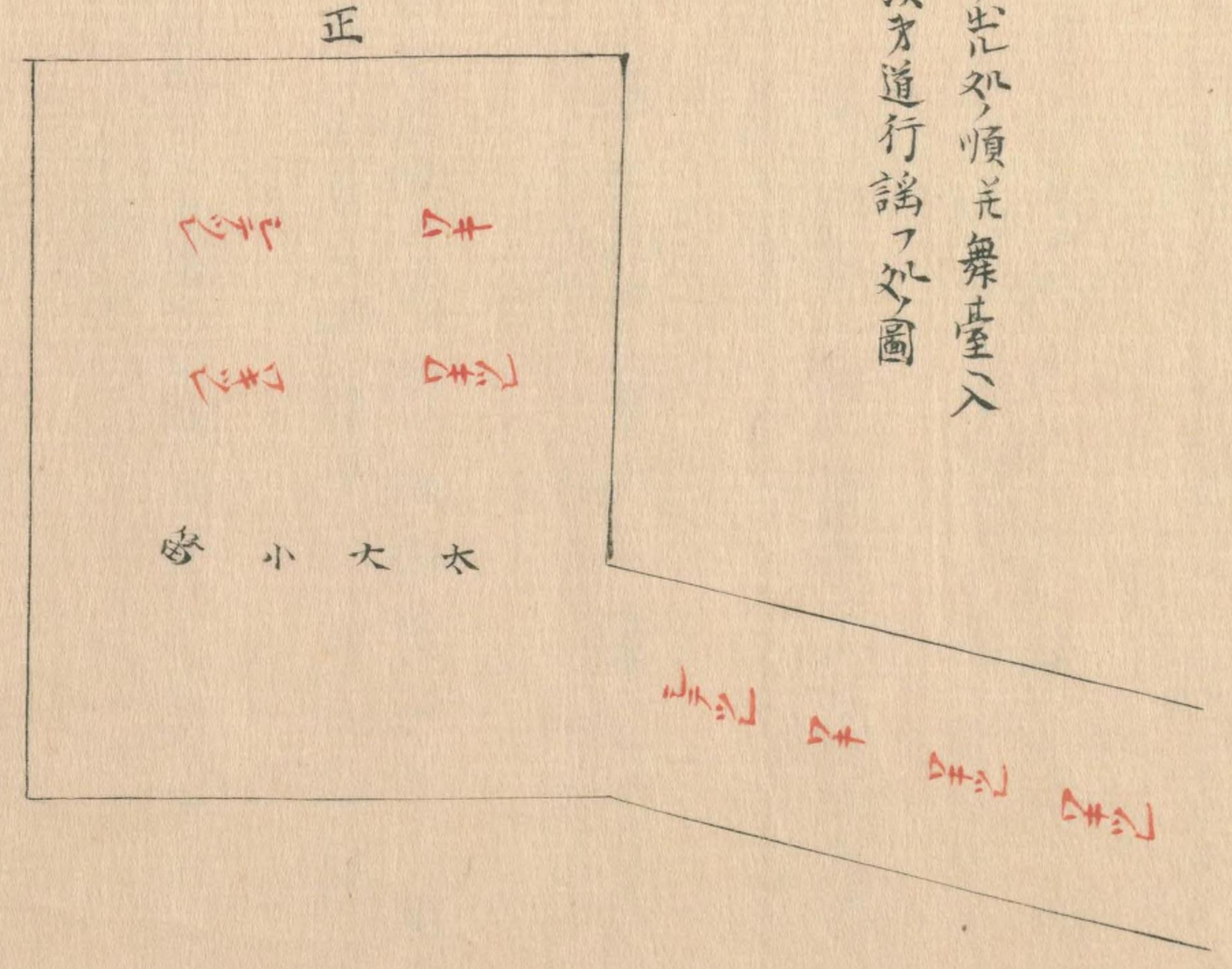
正ヘ直ニ
春ハ梢か咲ちこ初し　角ヘ行　花ゆきそひく
左ヘ廻リ
山ざくら　秋はもみぢをたに折て
大小ノ前ニテ小廻リノ正向直ニ雲ノ扇ノヒラキ
上ヲ見　サシテ右ヘ廻リ
月見るこゝろおそや四ざくら　大小ノ前アタリヨリ扇ヨコニフミ
ワキ別チニ立ヒテノ目付柱ノ方ヘ向テ下ヲ右ヘ
下ヘ向ツカト見又ホノ右ヘ下面ツカト見ヒカヘ角ヘ行
ものくもらんの雲の　角ニテ扇ヲシ角ヘ見左ヘ廻リ
雪をさそひて　大小ノ前ニテ小廻リノ正向直ニ左ヘ廻リカヘシテ
ゆく先ゝくてまよふ名をとゞめ　正ヘヒラキ直ニ
サシテ正ヘ出　足ヲメ右ノ足ノ爪ヲフミヒラキナカラ両手大キクヒロケ
直ニ上リ両手ヲ以ヘカヘシテ下ニ安座　安座ナリニ両手両方
大小ノ前ニテ小廻リノ正向直ニ左ヘ廻リカヘシテ　木ノ下ニテ正ヲ見
高砂のこゝのちりはものて山姥と　立右ヘ廻リ
シテ柱ノキハニテ右ヘケトメ左ヘツカト正ヘツカト左ヘノ足拍子二ツフミ
ものゝ曲鬼女のかりの雪　後ヨリ引立テ　下ヲ見
飛上リ下ニ居立ナカラ雲ノ扇ノ正ノ上ヲ見　手サケ立直ニ橋カリヘ行
ふりかゝり名をとゞめてやまもゝ
一ノ松ヨリサシテヘトケノキハニテヒラキ左ヘクルリ廻リ
シテカヽリ行
の曙よそみのしら山ももさくら

絶えずなま又山かい出めぐりして行末

マクキハニテ正ヘヒラキトメ拍子フミ入

もちつをありたる剣

次第ニテ出ル処ノ順并舞臺ヘ入
向合次第道行謡フ処ノ圖



山姥

装束之覚

シテ 面 痩女　襟 浅黄　着付箔　色色唐織
鬘　鬘帯 色色
後 面 小姥　襟 花色　着付箔縫入　半切
坪折 厚板唐織　腰帯 小姥　鬘　鬘帯　扇子
連 面 里面　鬘　鬘帯　着付箔　唐織
扇子

舞附

● シテハ朱　● シテツレ紫
● 狂言 記載ノ通

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

八幡や函山統そおろれるき狂女ふ
てゝ庭ゝうゝに笑をゝ伊ゝ山統
の山光ゝうまるとゝ事を曲舞ふ
作つくゝうゝひゝうふようゝ来章
部のゝもゝゝいゝそゝい又ゝ出ゝうゝ若
光ゝ事ゝゝゝまゝうまたゝゝゝゝゝゝ
某ゝ作ゝゝ唯ゝゝ作ゝ作ゝのゝ芸光ゝる
つゝとゝゝい那を出てゝゝ法やゝ賀の
浦船こゝれゝゝゝ来ゝゝゝうゝちの山戦て
神ふ森ちる西江の橋うまて来ゝる
戦場の旅ゝゝゝゝる社ゝるゝゝ月
指波ゝゝ浦ふゝのゝゝゝうゝ

の松のタ暗ゝゝぬ浮舟の罪ゝゝき
る法花のゝるゝゝのゝゝゝゝ
うゝゝゝ三戦場の国の来るる里と
ゝいゝゝゝ都ゝをゝさかるさゝゝ川
ふもゝふりゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ戦後戦中の境川ふゝゝ
ゝていゝゝゝゝゝゝゝのゝ二ゝる
中ゝゝ神ふ所の考ふ所ゝゝふゝる
ゝていまゝふゝゝゝ所のゝ生
波りゝゝ狂言境川ゝゝの芸をゝゝ所ゝ
いう松ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
考ふていゝゝる芸光ゝゝのゝおし

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

へて祈りくへ（狂言）き事ふていたすより
さきた寺へのたびまこの座の中ふも
上座下座のけろ我とやてゐ座の比の
けろ我と如来の御こゝろをひまたの
ふてこゝろのみこゝいたの浄土ふたと
へられまるたるれも能のたと御と御と
系のようも比のけろ我と一度のまり
くへ如来のおよいきまに仏ひたの
まてゐ名去けんなんからしきたまて
ゐる系おなとい叶ひふまして
きふのねくへ（ママ）祈んよろふ小の数ゐ
小教よう女此上帝図ゐやてゐるこ

中やくへ一撃あふ小侍ゐくまくへ
（狂言）ふねやん（ママ）さきた寺へのたびまこの座の中ふも
系やてくへこゝろのまやん中ふもの
ろ我とやてこゝろの浄土ふたと
たくられたるたまてゐ個の系おも
叶如中やん（シテ）実や常ふ西方
の浄土ハ十万億土とうも見ハ又浄土
系近の垂跡ゐるまハねきの山とやら
んふまりくへ（正）しこても修行の積れれハ
系おもい見ふうんおきからうこと
ふてまりくへ（ママ）しこたまひくへ
（ママ）さゐくへハ・ま中やくへしさんせんの人

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

の御うけ狂言 ゑぶし 早さあせんの事
てゐいこまけるぬとやうをうちそそ
しふてゐまりなるまきとの心持まて当
家内若ものつくまりくへ 狂言 まて事ふ
てゐ中をゐたいとの事ふてゐた叶ハ
ぬ用の事ゐる出まくい早仰も
古事ふてゐ心知案内の事ふて
ゐ百事ふ教中ゐ 狂言 まて御うけ百万
あるへ中そふまている先ゐくへ早更
も従是中ていさゐくハゆうてゐと
ゐらふをるまていゐ 狂言 何とゐ御ん〳〵 先
ふ中ゐくけんゐん出仕能ふまていハ

いゐ早泳ゐ御うけ及そうふいけんゐん
ゐる万ふていゐ中そまる通中そ事ゐると
のけふへまる万ふていゐくい 狂言 いやゐとや
らん日のくまそ疾ゐいくいゐ早未日も
るくいふ俄ふ着ていゐ取成ゐうて
泊ういくいゐ 狂言 いや泊ういくい

シテ ワキへ向ヨビカケル
ゐふくまひ人お宿ゐ参ゐまるゐ

日羽ゐ参ゐまうるゐトキニフシテノ謡ノ中ニ
狂言 不慣トきフワキハ仕てゐるトき羽モ同断
少者ゐりふまアゐまらまい早ゐ参てゐる

直シ出
是ハ御けるの心まて人里ゐまき所
ゐり日の着てまへいまうまいゐ居ふて

ワキへ
直シ出ル橋がゝり長クレハ是
ヨリ直シ出ル並ニブメイ入ル
足トメ
一ゐ所をゐまてせのひまへ早御う婦しまる

は饑に日の暮るゝ程をとゝめしてはや
うそ参らせん為にて候

橋掛リニテカケレハワキヘ向ナリニ是トメヲ是ヨリブタイヘ入真中ニ下ニ居ツレヘ向化ワキ訊キリ訊ナシニモ中ヘ行下ニ居ル

シテ今宵の
此宿参らせ候事別の子細にあらず
山姥の歌の一節うたひて聞せ給へ
年月の望なり鄙の思ひ出と思ふへし
その為にこそ日を暮らし御宿をも参
らせて候へいかさまにもうたはせ給ひ候へ

ワキ是は思ひもよらぬ事を承り候
扨誰と見て山姥の歌の一節と
は御望み候ぞ
シテいや何をか御つゝみ候ふ
らん、あれにまします御事は百ま山姥
山姥とてかくれなき遊女にてはまし
まさずや先此歌の次第とやらんによし
足引の山姥が山廻りすると作られたり
荒面白やは是は曲舞によりての異名
さて誠の山姥をはいかなる者とか知ろし

ろーてまひてりて（ママ）正山松そい山ふもと
鬼女そこて曲舞おもひつゝけてうたひ（ママ）鬼
女とい女の鬼そやよー（ママ）おふ成共人か
そとも山ふ住女ともハ童（ワラハ）そのよふ
ていさふらハゝそ（ママ）正事にあふいくさ
せんふしの菊菓の袈裟もかふ
ハ掛給ふ姫（ヒメ）ゆへふまうけ（ママ）正ぬ
松の色を春をまてく栄給ふ徳の

妙花とつゝく変世一曲乃故なりけり
志ゝゝいとゝゝそ（ママ）をも吊ひ舞歌
音楽の如音の声伴事をもの
狂りくなとゝゝいつも福呂とのうた
帰性の菩ふ立ゝそ（ママ）と相ふい
小山の名歌もかゝく声を揃ゝ
後の山姫ゝ（ヒメ）老鬼先を来ゝそ
ゝゝ（ママ）正心鬼の事を学あれ拙ゝ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用

ろーや月もろふりき山新よろそのの
まゐきーたるうほうをもき山焼みて
まー湯ゐうシテ迚ゝゐうふ出初しゑ
の姿の袖（ツレハ）多ゐもちろしめさる（ー
我ふ恐れ行目そよシテツレ共（正）ー志
ろーゐうろうゝゐ乃ろ〻海をれより
顕き出る姿ゝゝゝゝい人ゐ乃ゝ九シテ髪
ふいおろろ乃音を載さシテツレまゐこの

光ろう星のこゝーシテ拙（ツレハ）面の名を
シテツレ（正）さふぬり乃シテ杵（右ワケ止ラ見）志の鬼のか
たちをシテツこ（正）もひ拾てみる事をシテ河
ふたゝつんいまー（左足ツメ）（右ノ足ツメル）へのよふ鬼（正）一ゝろ乃（正ヒラキ）
ろ狩しまゐゝゝのよふをゐゝゝ（足トメ）（ス（拍子ニツ）（ス（拍子ニツ）（身ヲ出シ正ノ出）（左ノリ込ノリ込トキ枕ノシリ）（ユケル）（ユケル）（三立）
ゐの姿ふ〻〻おゐうさゐきお
ヒラキ
ゝとゐひー人ゝゐも我身のうへ小成
（ヲ初ヨリ左ヘ廻リむ打切ノ中ヘカケテ出ル）
（正ニ出シ正面ヲ見テトゐうゐーやト面ヲ出ル処面ヲ出ルトキツムリカシカタムケル心左右ノ方ヘカタムケル）
（シテ柱ノキハニテツレ向）
ぬつき浮世捨りもゐうーや〻〻

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

と申もあれどもやらん シテ立に
我も心山奥の春を山にふしてそう
こゑく宮居ふしてあまた一日寒ふ
八洲の春〳〵とて日もあの光
空とかすみ渡れる嵐松ふきそよて
風ぞ花の雪を散るシテきいたれん
ワキ〳〵業平の雪ふる日もあんふ
共深みてそ散るらんとも申つゝし

正
正を通ぶきそもも〳〵ぬ山中ふお
ろつゝくも呼子鳥の声ふこゑ
ふ我ぬ下ゝそて山ふそ幽
向ヲ遠ク高ク見
ゐり法性嵐そよそて上衆堂
正ヘ直シ
指をおろし雨雪ふそよて
抱子ニ刀
あしい下化衆生を表しそて金
引立左ノ引右ノ腰ヘ引分ケ向ヲ見テ扇ヲ立ノ方ヨリ太キク
正ヲ遠ク高ク見テ右ノ方見ヒシ渋見ル外目斗ミテ右ノ方見夫ヨリ少シ面ヲ右ノ方ヘ向ケル
前ヘサカサニ出シソノ扇ヲ逆ニメヨイテセホヲヨリ引立扇ノ先目ヨソケテヲ見ルヌ引右ヨリ右ノ腰ヘ引分ケテ床机ヨリ左立前ヘシヒリセホヲヨリ引立下ヲ見ル
ワキ
ふおもろ 柳山姫も
シテ
ツレヘ
立
せ雨もふそ春もふ〳〵咲そふを

大小ノ前ニテ正ヘニラキ
ゑを乍人なたをろわををの
左右
をつの月ふみ〳〵ぬ鬼とゑ人のよ
右込ヒラキ
らん　　ゑを乍蜉のうく衣揚ハ
大左右
ぬ神ふおろ末ハ末ハおろもの月う
正ヘ右込ヒラキ
うゐもも　うちもろも人のたく
まゐそぼ　　を　　
笛竜の花よ声ゐ
（左右合スト手左ノ手ニモナタレ袖ヲハナシ向ヘカヘツラ元ヲヒロケ両手ヲ大キクヒロ両手一ツガ合ス　デチサキニナラヌヤフニシテヲ二ヲ合ス
ニツニアサテモヨシ）
おろくうハ吹山焼うヨろ末ゐ　（コレヘ向ナカラ左ノ廻リ
ハ字サシメ出ヒラキ
ホ花ゆて世ろろふ世ろ多ゐくゐ

ヲメテサシテ角ヘ行
思ふハ狩も妻親うなたうち抱る
（角ニテ廻テヨト扇ヲ下ヘサゲ百足スラタルコロニテ前ニ扇ヲ（アゲヲサシ左ヘ廻リ
大小ノ前ニテ正
何事もよ〳〵是引の山姫う山ゟり
もろ〻者〳〵〳〵　是申の
（杖ツキ　是ヨリアトニツ共杖ツキ柏子ニテムム　石柏子
山兎う申
ハア　イヤツア　○○天　ハア　イヤツア○○天
（杖ツク　右柏子　左柏子
ハア　イヤツア　○○天　ハア　イヤツア　○○天
（柏子右ニ右ニヲスヘ左ヘヲシテヲ出シ　杖ツキ柏子ニツ共ヘツキ右ヲリ込ヒラキ
ハア　イヤツア　○○天　杖ツキナカラ角ヘ
行左北角ヘ行処正ヘニ三足出角ヲ見テヲイテ
角ヘ行角トリワキ坐ノ行ワキ坐ノ前ニテ
カドヲトツテ大小ノ前ヘ行ナカラ杖ヨコニメ
両手ニ持大小ノ前ニテ小廻リシテ杖両手ニ

国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1
ガラス使用

持ナカラ右ヲ正ヘノリ北正ヘノリ込トキ杖ヨ
コミノ右ノ手先ニナリ左ノ手アトニナル
○拍子フミヒラキサシニ杖右ニカタケ
下ニ居立左ノヒサタテ右ノヒサツキ右ヲ
正ヘ一ツガツシ又左ヘ廻リナカラ合シテ笛坐
ノ方ヘ向杖カタヨリヲロシ立太コ坐ヘ向杖
ツキナカラ直ニ太コ坐ヘ行杖ヨコニメ両手
ニ持小廻リシテ正ヘヒラキ杖ツキ趴ヒ出ス

（正）一樹の陰一河の流これ皆他生の
縁そかし ましてや我名を夕月
の浮世をめくる一ふしも

（シテヘ・ツレヘ）狂言綺語の道すくに讃仏乗（ツレノ方ヘ出）
の因そかし 荒御名残おしや
（中ニテ足トメ右ノ足引ナカラ左ノ手向ヘノバシ大ツフニ杖ヘカケ下ニ居立ナカラ右ノ手モシゴイテ下ヘサケ杖右ノカタヘアテ前ヘカツテ居立ツレヲシカト見）
暇申て帰る山の（面下ケ）（立杖ツキナカラシテ柱ヘクツロキ杖ステ扇ヌキヒラキ持）（地）（正ヘ出シ）（正）春ハ梢にさく
かと待し（角ヘ行）（シテ）（角トリ）花を尋ぬる
山廻り（左廻リ）（地）秋ハさやけき影を尋ぬる（大小ノ前ニテ正ヘヒラキヒラキサシニ面下ヘトリ）
月見る方にと（正ノ上ヲ見）山廻り（サシ廻シ角ヘ行）
冬ハさえゆく時雨の雲の（右ヘサク廻リテ角トリ扇カサシ）
雪をさそひて山廻り めくり（角ノ上ヲ見左ヘ廻リ）

大ノ前ニテ小ヒリメ正ニヒラキ
めくりくてんをまふ面
ヨコサシノ正ニサシツメヒラキ
あ机のまえにちりばめくく山
正ニシテ見
花とうたふる男女の有様見る座
拍子フミ拍ヒロハシ下ニ居立
トカフ雲ノ角ノ正ノヒラ見
うるめて花ふかめり笠ふり
後ロヨリ川立テ
下ラ見
手サケ立角ニ行
さてやすき名ふまうとみへ
角トリ罩出ニ行
ワキ座ヨリサシテニテ柱ノ方ニ行
山又面白き山めくりやまめく
シテ柱ノキハニテ小ヒリメ正ニヒラキ
面白き山めくりして行末も
右ウケトメ拍子フニ
志ゝたゝめふめり
角ヘニ入
立シテノアト
ニツキ入

替業

正ニヒシ
真ハ楠ふ咲うと徒し
角ニ行
角トリ
花をさゝそ
左ニヒリ
ひくく山ひり
大ノ前ヨリ小ヒリメ正向ヒ雲ノ角
サシテ右ニヒリ
牡丹ふさゝ名紀新を
ヒラ見
たゝ称て
目ぞるかくふと面白
角ヘニ入
立シテノアト
ニツキ入
大ノ前アタリヨリノ角ヨコニメフセ別ニサシヒスヘフニ
目付柱ノ方ニ向ヒヒラ右左ト面ツヒ見又ツク右左
角トリ罩出ニ行
ゆくくさくらまく
トル面ツヒ見ナカ
ラ角ニ行
角テ角カサシ角ノヒラ見テ左ニヒリ
の雲の
雲をさゝそひて山ひり
大ノ前ニテ小ヒリメ正ニ向ヒ右ニヒリカヘシテ
ゑんりくてんをまふ
正ニヒラキ
ヒニナシテ正面
ぬ玄龍ふのちり徒めくく
足トメ右足フニヒラキナカフ両手大キクヒロケヒニ
エヨリ両手カヘサシナカフ下ニ巻ヒ
海ヒナリニ両手両方ノ
大ツヒ見
正ラ見
山姥とあれる男女うたふる座
立右ニヒリ
シテ柱ノキハニテ

右ノテヲ正ヘヅカヘト出右ヲリ辻柏子ニツクミ

後ロヨリ小立テ下ヲ見

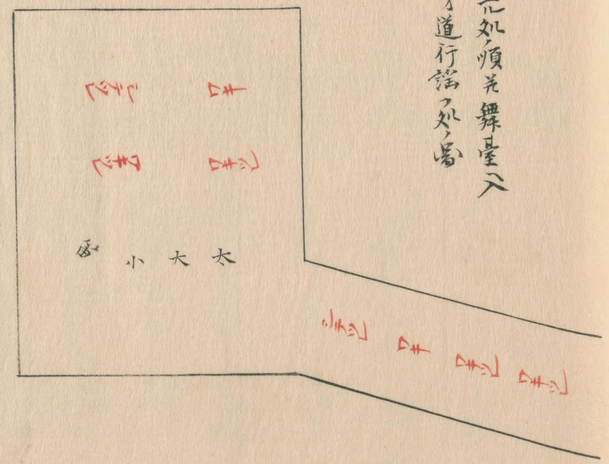
雲ヨリ下ニ居立テロヲ雲ノ扇メ正ノ立ヲ見

手サク立出ニ橋カリヘ行

ワ私ヨリサテヲクキハニテイクニテモ出リシナカラ行

ヲクキハニテ正ヘヒラキトメ柏子フミ入

次ニテ出処順先舞台ヘ入向合次ニ道行謡ノ処ニ



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用

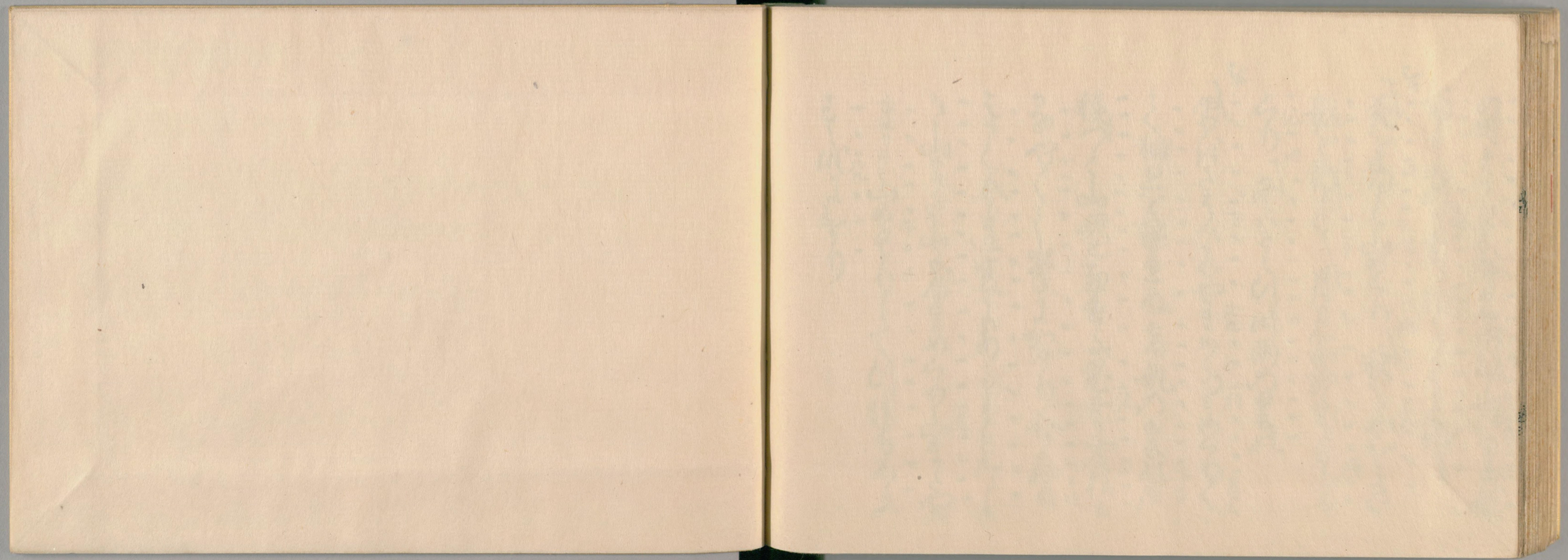
山姥

年月のぞみなり鄙の思ひ出と思ふべし
爲にこそ日をくらし御宿を
も参らせて候へ横ぬしうさ
に候ふ思ひもよらぬ事を
そもや何ゆゑ我らをバ山姥の
歌と給ふ御あれにわたり給ふハ百
ま山姥とて隠れなき遊女にてまし
ます先此歌の次第とやらんに
よし足引の山姥が山めぐりすると作
られたる言葉面白や是ハ曲舞に
よりての名なり誠の山姥をバ
いかなる者と知ろしめされて候ふ　山姥とは

山に住む鬼女とこそ曲舞にも
見えたれ　鬼女とハ女の鬼とや　よし
鬼なりとも人なりとも山に住む女なるを
妾が身の上ならずや年頃色にも出だし
言の葉草の露ほども
御心にかけ給はぬ恨み
申しに来りたり道を極め名を立てて世
上萬徳の妙花を開く事此一曲の
故ならずや然らば妾が身をも弔ひ
舞歌音楽の妙音の聲仏事をも
なし給はばなどか妾も輪廻を免れ
帰性の善所に至らざらんと恨みを夕
山の鳥獣も鳴きそへて聲をあげたり

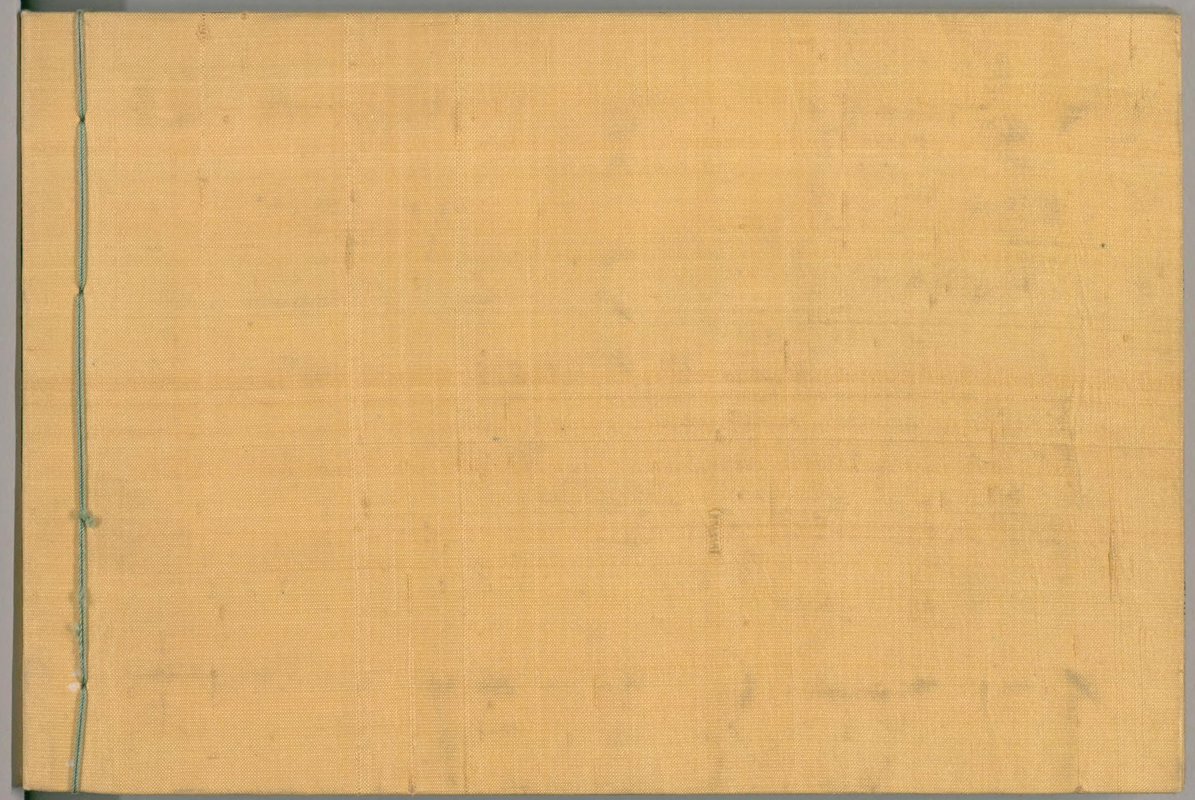
不二何とう恨こゝのとう収りんや萬
箇目前の境界ぎんりあうくし
ちくいとう前ぐこちらへ山又山まで
ひろこう青蔵乃秋を例つとおもう
ぎつと水ぎわう家よか碧潭乃人を
染てこそも おうろや月もこおろき
山陰よりぞこを面をしるかいをばう
山姥うくまの面とう 迎ろやおお
うみこう紫の気久くもまろう
あ〻我よの世をおひろそよ
ひよいおうろ
もわ孤生ろ沙ぎまれ
髪よハ前乃客と戴さ まおこう

先りを星のとう 枕面乃久ハ
きふやりろ 水の月の鬼乃とて
ちをこうひねくうまを 何よ
半そんいみ乃 鬼一角ら留。
れ我ぶのくもありさいもそう
こぶんとう思ひまうむ何うをひ
しもとも迷も多乃うくの成りへ
さ浮世借りもうやく
まれ我の一時とお金よ替一元
花よ清香月乃最是ハ数ろまさ
うよ彩達人れ一曲乃ぞうなるもある
月我よぐやく眼ひ落乃へ
もうよひくへとも



国立国会図書館　タイトル『[観世流能附并舞附本]』 請求記号 寄別5-6-2-1

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『[観世流能附并舞附本]』　請求記号　寄別5-6-2-1

ガラス使用